

令和6年度

試験名:学群編入学試験

【社会・国際学群社会学類社会学主専攻】

区 分	標準的な解答例又は出題意図
専門科目	<p>「コミュニオンは小さいものでなければならない。権力をもたないものでなければならない。自由な個人が、自由に交響する集団として、あるいは関係のネットワークとして、ほかのさまざまな価値観と感覚をもつコミュニオンたちと、互いに相犯さないものでなければならない。共存のルールを通して、百花繚乱する高原のように全世界にひろがりわたってゆく、自由な連合体 association でなければならない。」 ——見田宗介「世界を変える2つの方法」</p> <p>本文の標題である「草たちの静かな祭り」とは、道端に生える雑草たち、人間たちに踏み付けられ根を抜かれる雑草たちのように、現代の社会や文化のなかで周縁化される人間存在、現代文明や現代都市の「明るさ」から排除され差別される人間存在が、現代の社会や文化の片隅で、あるいはそれらから遠く離れた夜や〈闇〉の只中で、その人間存在としての〈輝き〉を取り戻してゆくためのマイナーな自己解放の試みを意味する。かつての革命運動・変革運動のように大がかりな集団としての解放や社会としての解放を声高に唱えるのではなく、わたしたちひとりひとり(「草たち」)の構成するコミュニオンの「静かな祭り」のなかで小さな自己解放を静かに積み重ねてゆくことが〈真の人間解放〉につながる、とする著者の根本的な思想を読み取らせることが本文出題の意図である。</p> <p>問1 現代社会における「障害者問題」がわたしたちひとりひとりの構成する現代の社会や文化の問題であることを、またそのようなものとして、「近代世界のヒューマンイズムと人間観の根底をゆるがす」ものでさえあることを、本文で紹介されている事例を出発点として、現代社会における具体的な「障害」の事例を挙げつつ論じさせることを意図している。</p> <p>標準的な解答例としては、1)本文を所収した作品に含まれるもう一つ別の文章〔見田宗介(著)「沈められた言葉たち——水俣・一九八六年」『白いお城と花咲く野原』2023年2月刊 河出書房新社 207-212頁〕のなかで考察される、水俣病による「ハンター・ラッセル症候群」という「身体症状」が照らし出す問題(「水俣病は水俣の病ではない。わたしたちの生きる仕方が水俣で、わたしたちの病を発言しているのだということ」「水俣病とは、ひとつの社会を生きるひとびとの『人と人のつながり方』の問題である」ということ)について考察することを挙げることができるし、2)「医学的な疾患名」としての「性同一性障害 gender identity disorder」(かつては「精神および行動の障害」に分類されていた)を生み出した背景にある近代社会のジェンダー秩序とその権力構造が、現代社会における〈性的多様性の発現と展開〉のなかで「x-gender」や「non-binary」などの〈茫漠とした未知の性自認のカテゴリー〉や〈性的人間としての新たな生き方〉を伴いつつ、その「性的欲望の装置」(ミシェル・フーコー)としてのあり方を次第に組み換えてゆくことの問題について考察することなどを挙げることでもできるだろう。</p> <p>問2 アラン・コルバンは「草たち」に向けられた人間の情動の歴史を主題化した作品『草のみずみずしさ』のなかで、近代社会において、「文明のなかの野蛮」と見做されたひとびとや都市のなかの貧しいひとびとや困窮するひとびとへの嫌悪が、しばしば「雑草たち」への嫌悪として社会的に表象されたことに言及しているが、現代文明や現代都市もまた、「明るさ」や「光」という一つの権力作用を通して、それらの「雑草たち」を、文明や都市の「明るさ」から隔絶された夜や〈闇〉のなかに排斥し続けてきた。こうした現代文明・現代都市の「明るさ」や「光」がこれまで「草たち」のように生きる人</p>

問たちの〈輝き〉を奪い去ってきたことについて、とりわけ現代都市における具体的な「明るさ」の事例を挙げつつ論じさせることを意図している。

具体的な解答例としては、1)シャルル・ボードレールの『パリの憂愁——小散文詩』(1868年)に充ち溢れるさまざまな片隅の情景、夜や〈闇〉の言葉(とりわけ「寡婦」や「黄昏」などの小品)を通して、近代都市パリの「明るさ」や「光」の権力作用について考察することを挙げることができるし、2)一九世紀以降の近代都市において「人工的な光で容赦なく明暗を際立たせる技法に『照明(イルミネーション)』の名称が当てられた」ことや「強制的な光学に支配された状況」が現代人に向けてますます整えられてゆくことなかで、「感覚領域の近代的な拡大は、調光に支配され、技術的に前もって制御された状況と視座(Lichtarchitektur)に縛られたかたちで果たされるのであって、自由の源泉となるのではない」という概念史上の皮肉な事態がもたらされたこと〔ハンス・ブルーメンベルク(著)「真理のメタファーとしての光」(1957年)〕の意味について考察することを挙げることでもできるし、さらには3)現代都市・東京で繰り広げられる都市再開発(例えば「渋谷から未来を照らし、渋谷から世の中を変えていく光になる」という意志(!)を込められた「渋谷ヒカリエ」という名の高層複合施設の建設やかつての宮下公園を再開発した「MIYASHITA PARK」という名の「新しいストリート」や「多機能な公共空間」の出現)のなかで、都市の消費生活者たちが「明るさ」のなかへと疎外されてゆき、都市の路上生活者たちが「明るさ」のなかから疎外されてゆく——いずれも人間存在としての〈輝き〉を自ら喪失しつつ奪い去られてゆく——二重の疎外のプロセスが意味するものについて考察することなどを挙げることでもできるだろう。

ボードレールが既にそのいくつかの作品を通して問題化していたように、近現代都市には、一方で「明るさ」や「光」のなかへとひとびとを疎外する様々な施設が存在するのであり、他方で「明るさ」や「光」のなかからひとびとを疎外する様々な施設が存在する。「明るさ」や「光」をめぐるこれらの様々な施設の複合的な連関を組織化する力こそ、近現代都市を貫く〈首都=資本 Capital〉の力に他ならない。

問3 かつての大文字の Communism がそうであったように、集団としての解放や社会としての解放を声高に唱えるのではなく、小さなコミュニンによる自己解放(「ミニコミ」!)を静かに積み重ねてゆくことが〈真の人間解放〉に繋がるという著者の根本的な思想に関わる設問であり、本文で紹介されている事例を出発点として、そのような思想が「近代世界のヒューマニズムと人間観の根底をゆるがす」ものであること、さらには真の意味で〈人間を大切にすること〉につながるものであることについて、各自の立場から、具体的な事例を挙げつつ論評させることを意図している。

標準的な解答例としては、この設問で論評の対象となる著者の根本的な思想が、二〇世紀型の革命を特徴付けてきた「否定主義」「全体主義」「手段主義」の反省の上に、「肯定性」「多様性」「現在において心を躍らせ、現在を楽しむこと」を特徴とする〈肯定的な革命 positive radicalism〉を提唱する著者のもう一つ別の議論にもみられる〈胚芽をつくる〉というイメージ(「新しい世界の胚芽となるすてきな集団、すてきな関係のネットワークを、さまざまな場所で、さまざまな仕方で、いたるところに発芽させ、増殖し、ゆるやかに連合する、ということ」)や、新しい時代の見晴らしを切り開くための〈触発的解放の連鎖〉のヴィジョン〔見田宗介(著)『現代社会はどこに向かうか——高原の見晴らしを切り開くこと』2018年6月刊 岩波新書〕とも呼応するものであることについて考察することなどを挙げることができるだろう。

令和6年度

試験名:学群編入学試験

【社会・国際学群社会学類社会学主専攻】

区 分	標準的な解答例又は出題意図
外国語	<p>社会学の入門書として英語圏で参照される、William Little 編の『Introduction to Sociology – 1st Canadian Edition』から出題した。本書は社会学史から、それぞれの専門テーマの動向まで広くおさえた入門書である。今回の出題では、社会学史において女性からの視点の重要性を提示した社会学者ハリエット・マーティノーの問題意識を記した部分から出題し、現代に通ずるような社会調査をめぐる記述について読解するような内容とした。</p> <p>問1 第一パラグラフに書かれている内容について、マーティノーの①社会学における功績と、②19世紀における社会改良運動とそこにおける女性の視点の欠如の指摘という2点について把握できているかを尋ねた。</p> <p>問2 マーティノーが1834年からアメリカにおいて、どのような研究を行ったか具体的に把握できているかを尋ねた。</p> <p>問3 当時のイギリスにおいて、マーティノーがフローレンス・ナイチンゲールとともにどのような問題に取り組み、どのような礎を築いたのかを理解できているかを尋ねた。</p> <p>問4 下線部訳を問うことで、社会的な問題意識について理解できているかを尋ねた。</p> <p>問5 下線部訳を問うことで、社会学において重要な礎となっている「理解社会学」という考え方が理解できているかを尋ねた。</p> <p>問5 マーティノーの「物事」への問題関心について、道徳とマナーの関係性に言及しながら全文が適切に要約できているかという観点から評価した。</p>